

ユダヤ人に関わる二つの言説をまず思い起こしたい。「もはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」(「ガラテヤの信徒への手紙」第三章第一八節)。イエスの死からさほど遠くない時期にパウロによって書かれたこの言葉は、キリスト教の普遍主義を代表する言葉として現在でもよく言及される。ここでいう「ユダヤ人」とは、ヤハウェの与えてくれた律法を遵守することを中心にして共同体を構成するユダヤ教徒のことである。このユダヤ人は西欧世界で何世紀にもわたって反ユダヤ主義の犠牲となってきた。シヨアー[☆]はその極である。本当のところ、いったいキリストという普遍の次元でユダヤ人はどのように取り扱われているのか。信仰に対して律法は「死の原理」(Badiou 28)であるともみなされる以上、やはりキリスト教の設定する普遍的次元では、ユダヤ人は存在する余地はないのであろうか。ちょうどナチズムの絶滅収容所においてのように。カトリック神学者R・P・スタニスラス・ブルトンの「アウシュヴィッツは、キリスト信仰の絶頂である」(Israel 309) という言葉は、キリスト信者には許しがたい冒瀆と聞こえるとしても、やはり捨てては置けないものを含んでいるのである。

他方、ユダヤ人をパレスチナの「唯一の正当な所有者」(Frank and Hershkowitz 75) と主張するシオニズムの言説がある。ここでもヤハウェの言葉に従ってユダヤ人の所有権の「正当性」は主張され、それが民族国家の基礎に据えられる。しかし、それは一見そう思われるのとは異なり、単純な特殊主義には還元されえない。シオニズムは「メシア主義をその本質的な定数とするユダヤ思想の恒常性を体现する。メシア主義とは、人間解放の時代の到来による歴史の超越を信じることである。ユダヤ人が自分の祖地に帰還することで自らを解放することは、人類全体の解放に先立ち、それを予告するのである」(6)。イスラエル国家は、その独立宣言にも明示されているように、シヨアーの犠牲ということと分かちがたく結びついており、そこでは、抑圧されてきた、迫害されてきたユダヤ人性の復権の願いは切実である。しかし建国から半世紀が過ぎてますます明らかになるのは、ユダヤ人の解放それ自体が、パレスチナ・アラブ人の不幸と苦しみ之源となったことであり、こうしてシオニズムの普遍主義は人類の解放につながるどころか、反対に非ユダヤ人の消滅を欲しているように思えてしまうのである。

以上の二つの言説がよく示すように、ユダヤ人を登場させる言説は、他者による表象であれ、自己によるものであれ、しばしば普遍と特殊という問題をめぐっている。上で取り上げた最初のものでは、普遍がユダヤ人を一つの特権に押し込め、第二のものでは、ユダヤ人が普遍へと膨張する。文字通り正反対のユダヤ人表象になっている。もちろんどちらの言説もきわめて抽象的で、多様な解釈を許すものであるが、しかしそれを実現しようとする歴史過程の中で、どちらの場合においても、主体となった側が自己を一方的に拡張して、外部に置かれた存在は消滅を余儀なくされてきたという事実が、否定しようがない。このことを踏まえて先の二つの言説を改めて読み直せば、そこには、宗教的あるいは民族的同一性の絶対化と呼べるような共通の思考方法が検出できる。

しかし、ユダヤ人に関わる言説には、宗教的・民族的同一性を絶対化せず、そういう境界を乗り越えて、外側に行くユダヤ人に照明を当てるものもある。

アラン・マンクは、スピノザ、マルクス、フロイド、アインシュタインという四人を一つのカテゴリリーに入れて、彼らは皆、ユダヤ人社会の周辺にいて、時にそれと激しくぶつかった「ユダヤ人アウトサイダー」であると言う。「ジユダイズム[☆]は自分自身の壁の外に身を据える場合ほど、人類の歴史の流れに決定的な役割を演じることは決してない」(Minc 12)。この考えはマンクの独創ではなく、すでにアイザック・ドイツチャーは、スピノザ、ハイネ、マルクス、ローザ・ルクセンブルク、トロツキー、フロイドを、「ユダヤ的ユダヤ人」という言葉で括って、マンクとほぼ同じような面に注目している。ジユダイズムの内部にいて、かつそこから出ている存在。ドイツチャーは、これを「ユダヤ異端者」とも呼んでいるが、この、ユダヤ人としての自己同一性に拘泥しない存在が、「近代思想の偉大な革新者」になったことの意味を考えるのである (Deutscher 26)。

本稿が取上げる、ピエール・ゴルドマンとジャン・ジャック・ゴルドマンの兄弟は、ドイツチャーやマンクが注目しているような、歴史の中で「偉大な」役割を果たした人物ではないかもしれないが、やはり「非ユダヤ的ユダヤ人」というカテゴリーに入れることのできる人たちである。戦間期にフランスに入った移民家庭に生まれたこの兄弟のアイデンティティを考えようとする時、ふつう移民のアイデンティティが問題になる場合に重要視される、出身社会の文化とホスト社会の文化という二つの軸は、確かに無視しえないものであるが、しかし、彼らの場合にはそれ以上に強力な軸がある。それが他ならぬショアーである[☆]。ゴルドマン一家の歴史はショアーに決定的な影響を蒙っている。移民第一世代としての両親はショアーを現実に生き、ショアー後に育つ第二世代は、自分たちのユダヤ人アイデンティティ形成の次元でショアーを再び生きることになる。ユダヤ人であるとはどういうことかという問題を抱えて、彼らがショアー後のフランス社会を生きて行く様を検討すると、そこには宗教的・民族的なユダヤ人アイデンティティの確立に励むというよりは、むしろ、自己主義に転落しがちのそのようなアイデンティティを相対化しつつ他者に関わる道を模索する姿が浮かび上がってくるのである。

セリーヌ・ディオーン「アブラハムの記憶」

まず、この歌を聞いてみよう。

ただひとつの祈り

物事と父祖たちの秩序に従う前に

旅立つ前に

忘却から救われたただひとつの別の生

刃によるよりもずっとよく刻み込まれている

アブラハムの記憶の中に

時を待つのは長い

苦しみは心に重い

しかし私たちの愛あなたへの信仰はとても大きい

それでもあなたのことを理解するのは時に難しい

明日もつと先で私たちの運命はどうなるのであろう
愛の平和とパンを少し
あなたの手のくぼみで

(中略)

子供たちを世の終りまで導いてください
涙の数よりもつとたくさん喜びで満たしてください
アブラハムの記憶を

この歌は、セリーヌ・ディオンの『彼らのこと』*Deux* というアルバム^{☆4}に収められている。このアルバムはフランスのポピュラー音楽史上記録的な売り上げを残したものであり、グローバル化した文化市場で消費しやすい曲が並んでいるように一見想像されるが、しかしこの「アブラハムの記憶」はあまりわかりやすい歌ではない。まずは『聖書』「創世記」に語られるユダヤ人の父祖アブラハムに関する歌であると考えられよう。例えば「創世記」に次のような一節がある。

主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

わたしはあなたを多いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべて

あなたによつて祝福に入る。」

アブラムは、主の言葉に従つて旅立った。(第二章第一―四節)

こうしてアブラム(神との契約の徴として、のちにアブラハムと名前を変える)を、神はカナン(現在のパレスチナのあたり)に導き、そこを与える。この一節は、今のイスラエル・パレスチナ紛争の、聖書の起源なわけである。それはいずれにしても、神の言葉に忠実であることと移住すること、この二つが一体化していることが端的に出ている一節で、セリーヌ・ディオンの歌う「アブラハムの記憶」ときわめてよく共鳴し合う内容であることが感じられよう。

しかし、この歌が直接にインスピレーションを汲んでいるのは、別のところであつて、それは恐らく、マレック・アルテール(Marek Halter 1936- ポーランド出身のユダヤ移民)の『アブラハムの記憶』という、同じタイトルの著作であろう。これはローマ帝国軍によつてエルサレムの第二神殿が破壊された七〇年から、一九四三年のワルシャワのゲットーにおけるナチズムとの戦いまで、連綿と家族の年代記を書きつないだ、ユダヤ人の一家系の遍歴を描いた歴史小説である。ほぼ十九世紀間にわたつて地中海世界、ヨーロ

ツパ大陸を移動し続けた、それは、移民の歴史、移民の物語である。また、フランスという空間に限ってみれば、パリを中心とした（生粋の）フランス人の正統的な歴史に対して、地方と移民に中心点を置いた、いわば対抗的な歴史叙述になっている。

セリーヌ・ディオンの歌う「アブラハムの記憶」は、この大部な歴史小説のまさにエッセンスを表現した歌になっている。二十世紀末の大衆文化、それも若者層を支持基盤とするポピュラー音楽の真つ只中に、ユダヤ的なものがこのように姿を現わしているのである。

ジャン・ジャック・ゴールドマンのユダヤ人アイデンティティ

この歌を作詞・作曲したのは、ジャン・ジャック・ゴールドマン Jean-Jacques Goldman である。ただ自分で歌うために詞を書き曲を作るばかりでなく、他の歌手たちのためにもたくさん歌を作っているこのミュージシャンは、現役のフランス人歌手としてはフランスで恐らく最も人気の高い人である³⁶。かつて、フランスの代表的な雑誌『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』は、失業の蔓延する社会に生きる若者たちを「ゴールドマン世代」という言葉で捉えようとした。それは、反抗の六八年世代の後に来た、就職と失業に脅かされて、確たる未来を自分のペースペクテイヴの中に置くことのできない「危機の世代」である。ゴールドマンはこの若者たちの「新しい教祖」だと『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌はとらえたわけである(Alia)。今から、もう十年以上も前のことである。

さて、現代フランスを代表するこのミュージシャンの生涯の起点は、フランスの外にある。

ジャン・ジャック・ゴールドマンの物語は、一九〇九年ポーランドに始まる。彼の父、アルター・モイツェ・ゴールドマンがルブリンに生まれたのである。(Fontaine)

ゴールドマンの父はポーランド系ユダヤ人で、一九二五年、わずか十五歳の時にたった一人でポーランドを脱出してフランスにやってきた。パスポートもヴィザも持たない不法移民であった。ブルターニュ地方の鉱山で鉱夫として働いた後、フランス軍に志願し、アフリカ騎兵となった (Rabi, *L'homme qui est entré dans la Loi* 41-42)。第二次大戦中は、共産党系のユダヤ人レジスタンス組織に加わり、戦後、ドイツ系ユダヤ人の女性³⁷と結婚して、五年にジャン・ジャックが生まれた (Fontaine)。八〇年代以降のフランス・ポピュラー音楽を代表するジャン・ジャック・ゴールドマンは、来たばかりの移民の子供、しかも、不法入国者の子供なのである。

様々な証言を突き合わせると、ゴールドマンがアルテールの小説『アブラハムの記憶』を読んで、その感動を核にこの「アブラハムの記憶」という曲を作ったことは間違いないところであり、そこにはユダヤ移民である自分の両親への思いが託されていることは否定できないと思う。この「アブラハムの記憶」の他にも、彼には、自分の父と母のユダヤ名を組入れた歌 (《Bonne idée》) もあるし、シヨアーで消されたユダヤ人少女サラを歌ったもの (《Comme toi》) もあって、迫害と移住に明け暮れたユダヤ人同胞への共感がゴールドマンには確かに強いのである。

しかし彼はユダヤ的なものばかり歌う歌手というわけではないし、ユダヤ人コミュニティー御用達の歌手というわけでもない。また、現在の一般のファンも彼がユダヤ人であるとか、移民の子供であるというようなことはあまり意識していないように見える。しかし、ゴールドマンにはユダヤ人意識が強烈にあり、そして、彼が自分をユダヤ人だという時の、そのユダヤ人意識は単純ではないのである。

私の両親はユダヤ教の忠実な実践者ではなく、私は宗教の中で育てられたものではありません。私はユダヤ教の教義や祭祀に関してはまったく無知です。「反ユダヤ主義者がいる限り俺はユダヤ人だと主張する」と言っていた男がいましたが、私が感じているのも、ややそういうことです。ユダヤ人かどうか問われた時、そうだと主張しないことも、あるいはまた、レコード会社が私の名前を変えようように求めてきたのでそれに従うということなども問題外です[☆]。私はこの差異をこのような意味でとても強く押し出すのです。
(«Positif et...non homologué»)

本稿の冒頭で挙げた、ユダヤ人とはユダヤ教の信者である、という言説、恐らく現在でも最も広まっているものであろうが、しかしこの引用ではつきりするように、ゴールドマンはそういう宗教的な水準で、自分のことをユダヤ人だと考えているわけではない。この問題をもう少し深めてみたい。

サルトルのユダヤ人定義

移民において、差異は可視的である。服装も肌の色も言葉も、食べ物も、きわめてわかりやすく違う場合さえまればない。こうして私たちは、賞賛するにしても、排斥するにしても、移民をその出身文化に閉じ込めてしまいがちである。シヨアーが壊滅させた東ヨーロッパのイーディッシュ世界からは、それ以前、すでに十九世紀の末から、西ヨーロッパ、アメリカ大陸へと多くのユダヤ人が脱出していた。いわゆるポグロムがその最大の原因であった。「反ユダヤ主義を逃れて」ポーランドを去った (Fontaine)、ジャン・ジャック・ゴールドマンの父もそういう移民の波の中にいたわけである。しかし、ベアトリス・フィリップが強調するように、東欧ユダヤ移民は均質な集合体なのではない。その中には、ただ単に、敵対的な非ユダヤ世界を逃れようとしたのではなく、ユダヤ社会の「息詰まる伝統的な環境」を逃れようとした人たちも少なくなかった (Philippe 255)。ジャン・ジャック・ゴールドマンによると、彼の父は、ポーランドの宗教的ユダヤ人の従順さ、無抵抗の態度を嫌って、「伝統的なユダヤ共同体の中には自分のいるべき場所をもたなかった」という (Eicheguyen and Goldman 68)。自由・平等を国の原理として掲げたフランスは、たとえ現実にはそうではない面が多々あったとしても、魅力に満ちた土地であった。フランスにやってきたユダヤ移民の家庭では、イーディッシュ文化の継承や保守などということはほとんど問題にならず、フランスへの同化に励むこともまれではなかった。こうして戦後に生まれ育った第二世代は、言葉の点でも、生活習慣の面でもほとんど他のフランス人の子供たちと変わりがなくなることになる。ジャン・ジャック・ゴールドマンは、彼の両親は本当にフランス人になりたかったのだ、と語っている。そして、そういう両親に学んだことを問われて、次のように答えている。

諸価値の意味。フランスへの愛。何事も決してあたり前ではないという事実。自由に通りを散歩することも、投票することも、無料で学校に行けることも、食べるものがあることも。私は本質的に彼ら「両親」と同じであり、彼らに教えられた通りの者です。(«Goldman, un homme juste»)

スーパースター、ジャン・ジャック・ゴールドマンの収入はもちろん巨大である。納税額も収入の六、七割に達してしまう。ある対談の中でこの点を質問され、スイスに国籍を移したほうが得ではないかと尋ねられた時、ゴールドマンは、パスポートも持たずにやってきた、不法移民の自分の父を受け入れてくれ

たフランスに対して自分は「限らない負債」を負っているのだ答えている。質問した哲学者が、あなたは本気でそう考えているんですかと、聞き返したほどである (Etchegoyen and Goldman 67-68)。ジャン・ジャック・ゴールドマンは、フランスと、正確には共和制のフランスとほぼ完全に一体化しているのである。

さて、戦後世代は、現在、フランス社会の様々な領域で活躍している。ジャン・ジャック・ゴールドマンより二歳だけ年上の、アラン・フィンキェルクロート Alain Finkelkraut もその一人である。この人は現代フランスを代表する知識人の一人と言えるとと思うが、彼の父親もポーランド系ユダヤ人であり、アウシュヴィッツからの生還者である。フィンキェルクロートは『想像のユダヤ人』(一九八〇)の中で、自分たち戦後生まれのユダヤ人のユダヤ人意識を詳しく分析している。それによれば、戦後生まれのユダヤ人が、何よりもまず拒否しようとしたのはイスラエリット、すなわちフランス革命の掲げた普遍主義を受け入れてフランス社会に積極的に同化しようとしたユダヤ人の行き方であり、それに反して戦後世代はユダヤ人という差異を他のフランス人に対して主張していったという (Le Juif imaginaire 97)。戦前までの同化主義に代わる、差異主義というわけである。しかし、問題はそのユダヤ人差異の内容である。フィンキェルクロートによれば、現実には生活のあらゆる面でフランス化が進んで、言葉も、服装も、関心も、教育も、他のフランス人と変わりがなくなっている(66)。すなわち自分の日常のどこを探しても、ユダヤ的なものではなくなくなってしまったわけである[☆]。そしてそういうユダヤ人戦後世代が見出した差異が、他ならぬシヨーであった。前代未聞の悲劇を蒙った民族に所属し、とりわけその犠牲者を家族にもつことは無敵の差異になったと言っ(17-19)。僕のおじいさんはアウシュヴィッツで殺されたんだ、と言っ、(この紋所が目に入らぬか!)と言った場合のように、皆跪いたというわけである。想像の中で自分をひたすらユダヤ同胞の苦難に一体化して、そのようにして得られるユダヤ人というアイデンティティを「ブローチ(121)のように飾る。こうした「想像のユダヤ人」(6)たちのユダヤ人差異には中身がなく、その主張は「無のひけらかし」(103)にすぎない。

ジャン・ポール・サルトルは戦争直後、『ユダヤ人問題についての考察』という著作を発表した。この著作は、アルベール・メンミヤクロード・ランズマンなど戦前に生まれたユダヤ人の間でも反響を呼んだが、戦後世代は強くその影響を受けている。サルトルは、この中で、ユダヤ人として自分を選択する「真正のユダヤ人」を、ユダヤ人という条件から逃げて「普遍的人間」への道をとる「非真正のユダヤ人」、つまり同化ユダヤ人イスラエリットから区別する (Sartre 166-167)。「真正のユダヤ人」は、一見そう見えるのとは反対に、ユダヤ人固有の内存在性を把握してそれを核に生きようとする人のことではない。サルトルはユダヤ人を定義して、人種・歴史・宗教・土地などの特殊性はとらずに、こう述べている。

反ユダヤ主義を引起すのはユダヤ人の性格ではなく、反対に反ユダヤ主義者がユダヤ人を作り出すのである。(173)

つまり、サルトルは、ユダヤ民族の文化的実質ではなく、その民族に向けられた他者の否定的な視線の共有を彼らの特異性としたのである。その画期的なところは、まさに本質主義的な規定を退けたことにある。十九世紀末に起こった有名なドレフュス事件に際して、「ドレフュスが裏切ることができるといふことを私は彼の人種から結論する」と言っモーリス・バレスの人種決定論に典型するよう、ユダヤ人について語る場合、排斥するにしても、擁護するにしても、その人種や宗教、慣習など、何らかの固有性へのレファレンスが不可避であったわけで、サルトルはそうした偏見や伝統へのこだわりを断ち切って、ユダヤ人の固有性に対して一種の白紙還元を行なって、他者の反ユダヤ主義にユダヤ人性の核心を求めたの

である。こうして「真正のユダヤ人」とは、サルトルによれば、ユダヤ人として排斥してくる、拒否してくる相手に対して、それを避けることなく、自分をユダヤ人として対立させる人のことになる^{☆10}。「私は真正のユダヤ人であった」(Le Juif imaginaire 16)と振り返るフィンキェルクロートも、ユダヤ人として差異を主張した時、明らかにこのサルトルの枠組みの中にいたのである。先ほど引用したジャン・ジャック・ゴールドマンの、「反ユダヤ主義者がいる限り俺はユダヤ人だと主張する」という言葉は、初めて耳にする人には何か奇異な感じがしたのではないかと思つが、元はやはりサルトルなのである。

ピエール・ゴールドマン、あるいは「正しき人」への迷走

さて、ジャン・ジャック・ゴールドマンには七歳年上のピエールという腹違いの兄がいる。今ではこのピエール・ゴールドマン Pierre Goldman の名は一般にはほとんど忘れられてしまつて見えるように見える。しかし、二十年以上も前、一九七九年の九月二〇日、パリで彼が何者かに射殺された翌日、新聞『ル・モンド』はその事件を第一面で報じている^{☆11}。そしてその記事はこの被害者にまつわる関心ごととして、彼は七四年、三件の強盗と二人の殺害の罪により無期懲役を宣告されたものの、殺人については無実を主張し続け、七六年五月再審によりその件については無罪が認められて、ほどなくして自由の身となつてたことを示している。しかし、ピエール・ゴールドマンにまつわる社会的関心はこのような裁判上の逆転劇に限られるものではなかつた。

ピエール・ゴールドマンは一九四四年六月、占領下のフランスに生まれている。すでに彼の父のことは述べたが、ピエールの場合は、母もポーランド系ユダヤ人である^{☆12}。当時、二人とも共産党系のユダヤ人レジスタンス組織の活動家であつた。戦後、ポーランドの社会主義体制に協力するべく母はポーランドに戻つて行つた。しかし、父はポーランドを嫌い、息子ピエールとともにフランスに留まり、後に再婚して、すでに述べたように、弟のジャン・ジャックが生まれたのである。

兄ピエールは、弟とはかなり違う生涯を歩むことになる。ピエールは非常に早くから政治運動に入つてゐる。初審の起訴状によれば、彼は六八年五月の学生反乱に関わつてゐる (Pierre Goldman 11)。そして六八年から六九年にかけてベネズエラのゲリラ組織に加わり、後、帰国して、逮捕のきつかけとなつた犯罪を行なつた。世間は極左の活動家から強姦殺人犯へという、六八年世代の転落に関心をもつたわけである。実際、ピエール・ゴールドマンが裁判にかけられた時、断罪する側はもちろん、彼を弁護する側にも、六八年世代全体が裁かれるのだ、とする論調が強くあつて、ピエールは六八年世代のシンボルに祭り上げられて行つた。ユダヤ移民の二人の兄弟は、一方はこうして暴力的反抗のシンボルに、他方は、当時まだほとんど無名のロック・バンドで歌つていたが、すでに見たように、後に、六八年以後の閉塞した状況を生きた若者のシンボルになるのである。

ところで、ピエール・ゴールドマンは、終身刑の判決を受けた後、獄中で『フランスに生まれたポーランド系ユダヤ人の不分明な記憶』という著作を執筆し、刊行した。小説ではないが、これにゴンクール賞を与えるかどうかをめぐつて委員会が紛糾したほど、当時フランスで評判となつた著作である。ピエール・ゴールドマンは、その中で、自分が六八年世代のシンボルにされることに対してきつぱりと異議を唱えてゐる (Pierre Goldman 241)。「わゆるノンポリが闘争のこちら側に留まつていたとしたら、ピエールはその向こう側について、同世代の反乱に「淫らな香り」をかきとつていた。「学生たちは」自分たちが暴力の中に、反乱の中にあるように思い込んでいたが、彼らが投げつけているのは敷石であつて、手榴弾ではない」(70)。こういう「遊戯」の中の学生たちに本格的な武力闘争を展開するように勧めて、相手にされなかつたピエ

ールには、六八年五月の騒ぎは、「集団的なオナニー」(70)でしかなかったわけである。こうしてピエールは、学生革命家たちの大はしやぎするパリを去って、ベネズエラで武装ゲリラ組織に入って、本物の革命家になろうとした。

しかし、彼はどうしてこれほどパリの学生たちに対して厳しかったのであろうか。その理由は、先ほど挙げた彼の著作を読むとわかってくる。すでにそのタイトル、『フランスに生まれたポーランド系ユダヤ人の不分明な記憶』が示しているように、ピエールは本書で政治的立場としての学生運動家、或いは極左革命家というところではなく、東欧ユダヤ移民というところで自己規定している。しかしその際、彼は、父母の生まれた土地の言語や生活習慣に自分のルーツを求めるという方向に向かうのではない。ポーランド文化もイーディッシュ世界も彼の中では表層にとどまり、彼の自己意識を深いところで決定しているのは、家族をはじめとする、ユダヤ人同胞の抵抗と犠牲の記憶である。一言で言えば、ショアーの記憶である。

私はユダヤ人として死の危険の中に生まれた。戦う年齢にはなかったが、生まれるやいなやポーランドの死体焼却炉の中で死に果てうる年齢にあった。まず最初に殺害されたのは子供たちだったのだから。

(27)

弟のジャン・ジャックは兵役にも就き、そのユダヤ人性の主張はフランス共和国の公民としての行動とぶつかることはなかった。自由・平等のフランスへの忠誠を重んじた両親の教え、願いに忠実であったと言える。それに対し、兄ピエールは兵役も拒否して国外逃亡し、早くからフランスの公権力に追われる身となった。しかし、だからと言って兄のほうは父に反抗したのだと、単純に解釈することは正しくない。ショアーの記憶は、まず誰よりも父を通して、ピエールに突き刺さっていた。ピエールは、戦争中ワルシヤワに生きていなかったことを「一種の原罪」のように感じ、また、自分の両親を含めて、ナチズムに抵抗したユダヤの英雄たちにふさわしい生き方をしていないことを深く恥じていた(36)。六八年五月の騒ぎを見下して、その直後にパリを去ってベネズエラのゲリラ組織で武器をとったのも、自分の人生のうちに蓄積した罪を償おうとする試みであったようである。そして、満足のいく成果も得られずに、帰国して犯した強盗は、どこに行っても消すことのできないその「原罪」に対する罰だと考えられている(36-37)。さらに、二人の殺害という濡れ衣を着せられて無期懲役に処せられた時、ピエールはこの受難によってユダヤ人と名乗る権利を与えられたように感じたという(38-39)。彼の政治的態度決定を、もう一段深いところで、ユダヤ人の抵抗と犠牲の記憶が支えていたのである。

イスラエルの研究者ヤイル・アウロンは『六八年五月の極左ユダヤ人』の中で、フランスの学生反乱の中心にユダヤ系の学生が指導者として多数いたことに注目し、彼らの反抗とショアーの記憶との間にきわめて密接な関係があったことを明らかにしている(Auron)。それを読むとピエール・ゴールドマンの上述のようなユダヤ人意識は、彼の同世代の多くのユダヤ人のそれと共通するものであることがわかる。しかし、フィンキェルクロートはピエール・ゴールドマンの突出していた点を次のように捉えている。

私たちが自分の生を整えていたのに対し、ゴールドマンは、ジェノサイドの受難者や生還者のもつて負った限らない負債を弁済することに自分の生を捧げていたのであった。(Le Juif imaginaire 41)

しかし、ショアーの記憶がピエール・ゴールドマンの中にどれほどラディカルな変容をもたらしたとし

でも、シヨアーの犠牲者との関係でユダヤ人性をとらえる基本は同じである。この限り、すでに検討したサルトルの理論で説明できると思う。しかし、これから注目していきたいのは、ピエール・ゴルドマンのユダヤ人意識が、サルトルの切り捨てた、ユダヤ固有の次元にも根を伸ばしていることである。

獄中のピエール・ゴルドマンを何度か訪れた、法律家で著作家のウラディミール・ラビ（リトアニア出身のユダヤ移民）との面会の中で、ピエールは自分のユダヤ人性についてこう語っている。

私が自分のユダヤ人性を主張する唯一のやり方は、変わらぬパリアになることでした。私は死体焼却炉の匂いの中で生まれました。私は若い時ずっと、ワルツシャワ・ゲットーの蜂起の雰囲気を再現したいと思っていました。苦しみとヒロイズムです…でも、自分自身は臆病でした。それで私は自分の恐怖を乗り越え、偉業に近づきたかったのです…(Rabi, «Pierre Goldman en prison» 609-610)

「」でも、ピエール・ゴルドマンのユダヤ人意識が、サルトルの枠組みでつくられていることがはっきり出ている。しかし、牢獄に閉じ込められたこのサルトル世代の極左革命家の口から、意外な名前が挙がってくる。

「私が最も心打たれた人物の一人は、シュヴァルツ・バールです…その本によって、また、黒人たちへの温かい心によって。」それから彼は黙り、そして突然、「問題は、どのように〈正しき人〉になるのかということなのです。」(610)

ピエール・ゴルドマンが口にした「シュヴァルツ・バール」とは、アンドレ・シュヴァルツ・バール（両親はポーランド出身のユダヤ移民）のことで、言及の対象となっている「その本」とは、『最後の正しき人』であろう^{☆13}。これは一九五九年のゴンクール賞を得た小説であり、一九五〇年代に入ってからレジスタンスの経験に汲んだ、いわゆるフランス語表現のユダヤ人文学が社会の注目を集めるようになった、その傾向の代表作である。ピエール・ゴルドマンがいつ頃この著作を読んだのかわからないが、刊行後世間で話題になっていた時期であるならば、それはまさに、彼が高校をいくつも退学になったり、共産党系の政治組織に入ったり、また、産みの母のいるポーランドを何度か訪れたりして、彼の人生が、フランスの多くの若者のそれとは別れてくる時期と重なっている。パリの街頭で銃弾を打ち込まれて果てたピエール・ゴルドマンの文字通り波乱の人生には、この『最後の正しき人』が決定的な磁力を及ぼしているのかもしれない。

〈正しき人〉——それは、普通に考えられる、道徳的に立派であるとか、社会正義の実現に働くとかいう内容ともちろん無関係ではない。しかし、シュヴァルツ・バールは西欧近代のヒューマニズムや平等思想に基づいて、それを描き出すわけではない。

〈正しき人〉は私たちの苦しみを受け取ってくれる(…)。そうしてそれを天に上げ、主の足許に置く。主は許してくれる。こういうわけで世界は続くのだ…私たちの一切の罪ととも(Schvartz-Bart, *Le dernier des Justes* 57)。

〈正しき人〉の活動は地上で閉じてはいない。近代の歴史過程の中で棚上げされ、やがて消された、神のところまで行く。シュヴァルツ・バールは「遠い過去に遡るユダヤの伝統」の中から〈正しき人〉を取

り出しているのである(12)。各世代には少なくとも三十六人の「正しき人」がいる。彼らはふつう世に埋もれて、質朴で、額に汗して生きている。しかし、人びとが危機に陥った時、現われて、苦しむ同胞を救う。そうして後、再び以前の、無名で、慎ましやかな生活に戻って行く(Dictionnaire encyclopédique du judaïsme 569)。シュヴァルツバーは、この、「私たちの一切の苦しみが流れ込む」(Schwarz-Bart, Le dernier des Justes 12)「正しき人」の伝統を、中世からはじめて、最後、ナチのガス室で倒れた「最後の正しき人」まで描いた。ユダヤ学の専門家ゲルシヨルム・シヨレムなどからは、シュヴァルツバーのユダヤ伝統理解に疑義が提出されたりした^{☆13}が、こうした学問的な批評とは関係ないところで、ピエール・ゴールドマンはこの「正しき人」の観念にぶつかって、それと悪戦苦闘していたのである。

すでに述べた『アブラハムの記憶』の著者マレック・アルテルは、「私のユダイズムはシナゴグのそれではなく、人間の諸権利のジュダイズムである」と、「正しき」の実現をユダイズムの核心に置いている(Guland and Zerib 93)。この言葉に従うなら、「正しき人」の観念は、ユダイズムの一側面などというものではなく、その本質そのものということになる。また、哲学者エマニュエル・レヴィナス(リトアニア出身のユダヤ移民)もほぼ次のように述べている。「ユダイズムにおいて、正しき社会の希求は、どんな個人的な信心をも超えてすぐれて宗教的な行為であり」(Lévinas 38)、「メシアとは他の人々の苦しみが課してくる負債から逃れることのない「正しき人」のことである(120)。また、レヴィナスによると、タルムードには「私は正しくなればなるほど、いっそう厳しく裁かれる」(39)という言葉もあるようである。一見デタラメのように見えるピエール・ゴールドマンの生涯も、こうしたユダイズムの枠組みをあててみると、「正しき人」に向かって暗中を模索して、実はユダイズムの奥底から来る道を進んでいたのだと解釈できるように思う。

アイデンティティを超える「正しき人」

こういう兄に対し、熱狂する観客を前にステージで歌うジャン・ジャックには、「正しき人」は別な道を行く人なのであろうか。しかし、「ただ何人かの人たち^{☆14}」という歌は次のように締めくくられる。

野獣たちもあきらめる、最も野蛮な地には

人間たちが足をとられる大きな沼地には

あらゆる神々がわれわれを離れ

そして見捨てる、苦しみの果てには

悪魔たちですら躊躇するあの黒い泥の中には

跪いて許す

ただ何人かの人たち

何人かの正しき人たち

何人かの正しき人たち

紛れもなく「正しき人」を主題としている。「正しき人」への思いは、極左革命家の兄と、シヨール・ビジネス界のスーパー・スターの弟、この二人の東欧ユダヤ移民の子供を確実につないでいる^{☆15}。

ゴールドマン兄弟は、すでに見たように、ユダヤ教の教義や儀礼からは遠いところで成長した。それどころか、家では宗教は「民衆のアヘン」であった、とエマニュエル兄弟は振り返っている(«Goldman, un homme juste»)。

聖書もタルムードも学ばず、シナゴグにも行かない、またイスラエルに移住しようとしてもしないこのポーランド移民の一家は、「悪しきユダヤ人」ということになる⁵⁶⁾。そういう「悪しきユダヤ人」の中に根付くこうした〈正しき人〉への志向とは、彼らが改悛して、ユダヤの古き伝統の境内へ戻って行く⁵⁷⁾として示しているのだからであろうか。それを考えるために、ここでもう一度アラン・フィンキェルクロットの『想像のユダヤ人』を取り上げてみたい。

フィンキェルクロットは八〇年代初頭のこの著作の中で、現代の様々な精神的問題の原因を要約するのに「疎外」(alienation)という言葉がよく用いられると述べている。これは当時のいわば時代の言葉なのであり、その語る筋書きは、父や母、システムや社会などが自己の内部に入り込んで、この内なる異物が自己を抑えつけているので、これを排除して十全たる自己になろう、というものである(115)。こうした疎外論は、自己と他者との関係についてのある特定の理解に基づいている。他者の視線によって自己が客体化されて、しかもその内容に対して自己は何もできない。その視線が作り出し、押し付けてくる像の下で自己は窒息してしまう。他者の視線とはだから自己に対する圧制である。フィンキェルクロットは後の著作『愛の知恵』の中で、このような他者の視線の暴力をサルトルの『存在と無』に従って説明している(La sagesse de l'amour 25-28)。マジオリティの差し向ける拒否がユダヤ人を作り出すというサルトルのユダヤ人定義をここで思い出してみるなら、サルトルがこの他者の視線の圧制ということユダヤ人問題に適用したことは明らかであろう。サルトルのユダヤ人定義、従って、それに基づくユダヤ人アイデンティティとは、要するに疎外論にほかならない。そして、フィンキェルクロットは『想像のユダヤ人』の中で、まさにこの自己疎外とその克服という筋書きに就き従うアイデンティティから決別して行くのである。というのは、この「現代のモラル」が「自己であること、ただ自己であることの中に、苦痛や倦怠がありうる」ことを見ていないからである(Le Juif imaginaire 115-116)。『愛の知恵』の中では次のように書かれている。

自己であること、自己を見出すこと、外来の諸悪から自己を純化すること、このような願望以上に、おそらくもっと深くもっと決定的なものがある。それは、自分の自己から離脱する夢、自己自身への還帰という運命から逃れる夢である。(25)

この「自己自身への還帰という運命から逃れる夢」が、〈正しき人〉の位置する次元を確定するために重要な指標になると思う。

すでに見たように、実質的にはなんらユダヤ的な要素をもたず、ただ空想の中で自分を〈アウシユヴィツの子〉と確信した「想像のユダヤ人」は、そのようにして自己の根底を固めて相手に対し自己を画したわけで、アイデンティティとしてユダヤ人性を生きていた。しかしフィンキェルクロットは、そういう差異主義がショーアやその犠牲者を自分のために利用しているにすぎず(Le Juif imaginaire 43)、「私は自分のユダヤ人アイデンティティを通して自分自身を愛していた」(212)のだ、という批判に辿り着く。

自己に安らぐ主体は言葉なき責めにより窮する。(Le Juif imaginaire 205)

これは『想像のユダヤ人』最終章のエピグラフとして掲げられている、レヴィナスの言葉である。自己の確立・自己の成長・自己の実現、自分のことばかり考えているという自己の揺らぐ瞬間をポジティブに捉えた言葉である。フィンキェルクロットの『愛の知恵』はレヴィナスの哲学に多くを学んだ著作であるが、その中で、こうしたサルトルとは別の自他関係を次のように述べている。

無縁な何か——他の人の顔——がやってきて、私は自分の無関心を断ち切らなければならなくなる。私は邪魔され、自分の生の酔いから醒まされ、自分の独断的な眠りから自覚まされ、自分の無実の王国を追われ、自分で選んだわけでも望んだわけでもない責任を他者の闖入によって課されてしまう。(142)

自分の外部に在って、自分とは関係のない、異質の他者が現れて来て、自分らしさをこの上なく大切に、自分の存在を充実させようと努めている私、要するにアイデンティティの論理を生きる私を打ち砕く形で「責任」を課してくる。フィンキェルクロートのユダヤ人アイデンティティは、こういう自他関係における「責任」を軸にした次元によって相対化されているのであり、すでに前節で掲げたレヴィナスの言葉に明らかなように、こういう「責任」を逃れない人こそがまさに〈正しき人〉なのである。

歴史に対する、道徳の名による自由、文化（父祖の土地、建築、美術）を超える〈正しき〉、こうしたすべては、結局のところ、ユダヤ人がどのように神と出合ったかを物語る言葉なのである。(Levinas 41)

〈正しき人〉であることは、ユダヤ共同体やその文化に、あるいは同胞犠牲者に自分を一体化し、そのようにして自己安定を確保し、外部に直面しようとする、アイデンティティ確立の運動ではない。〈正しき人〉であること、あるいは少なくともそうであろうとすることは、ジュダイズムの本質的な構成要素である観念に汲むという意味でその内部にありながらも、同時にまた、そのユダヤ的なものを生きたことそれ自体が、ユダヤという城塞に立てこもるのを許さない、さらにはそこへの所屬を断念することすら要求してくるという意味でユダヤを超え出る、そういうパラドクスを生きたことである。言い換えれば、「非ユダヤ的ユダヤ人」というドイツチャーの言葉が文字通り当てはまる、安定した文化的同一性を揺さぶられた存在が、〈正しき人〉なのである。

ピエール・ゴルドマンとジャン・ジャック・ゴルドマン、この兄弟はユダヤ共同体主義の側からすれば確かに「悪しきユダヤ人」であろうが、〈正しき人〉に向けてユダヤか非ユダヤかという境界を超えつつユダヤの精髓を本当に生かして行く道を模索する彼らの歩みを追いかけて行くと、ユダヤ人であることはユダヤ人であることを辞めること、という非合理的な定義すらますます確かなものに思えてくるのである。

注

☆1 二十世紀半ばのこの歴史事象の内容の確定は、ガス室否定論者の登場によって激しい戦いとなったが、この事象を何と呼ぶか、名称自体をめぐっても、また「一つの戦い」(Rabinovich 45) が展開されている。英語圏ではホロコーストがふつうで、日本でもこれはよく目にする言葉であるが、これはユダヤ教で本来神前に贖罪の獣を犠牲にする儀礼、及びその際に供える獣の丸焼きを指示する言葉である。これをヒトラー・ドイツに虐殺されたユダヤ人に適用することは、ユダヤ人を人間以下のものとしたナチズムと同じような論理構成をとってしまうことになるし、また、犠牲者はいったいどういう「贖罪」を引き受けたというのであるうか、という抵抗がある。こうしてユダヤ人の中にはこれを拒否して、〈大惨事〉を意味する、〈ブライ語の「シヨア」(Shoah) という言葉を使う人が少なくない。

☆2 「judaïsme」という語は「ユダヤ教」と訳されることが多いが、これではユダヤ人の多様な現実を示すことができない。実際フランスの辞書では、ユダヤの宗教という意味の他に、ユダヤの文明、ユダヤの世界観、さらにはユダヤの共同体などの意味を掲げている。つまりこの語は、聖典であれ俗であれ、ユダヤ人の活動を総体として捉えるものである。そこで本稿では「ジュダイズム」と表記して、こうした意味を示したい。

☆3 戦後世代のユダヤ人アイデンティティのもう一つ重要な構成要素は、本論ですでに言及したイスラエル国家である。多くの著作がこの問題を論じているが、例えば、レジーヌ・アズリヤはこう述べている。「一九四八年の建国以来、とりわけ六日戦争以来、ユダヤ人の生活におけるイスラエルの中心性は異議のないものである。イスラエルはユダヤ人アイデンティティが結晶化する第一の極になった。多くの人にとって、それはシナゴグや宗教儀礼に取って

代わっている」(Azria 98)。しかしゴールドマン兄弟には、こうした「イスラエルの中心性」は認められない。

☆4 一九九五年発売。英語圏や日本では『フレンチ・アルバム』というタイトルがつけられている。

☆5 二〇〇〇年一月、『日曜新聞』が「フランス人の好むフランス人」という恒例の世論調査の結果を発表した。それによれば、ジャン・ジャック・ゴールドマンは前回(二〇〇〇年八月)同様第四位である。彼の上にランクされているのは、柔道のダヴィッド・ドゥイエ、ホームレスのための活動で知られるピエール神父、それにサッカーのジネディーヌ・ジダンヌであり、音楽関係者はいない。

☆6 母ルートはミュンヘンの生まれ。一九三三年ヒトラーが政権に就いた年、ドイツを逃れてリヨンに来た(Eicheggen and Goldman 69-70)。

☆7 セルジュ・ゲンズブール(両親はロシア出身のユダヤ移民)やエンリコ・マシアス(アルジェリア出身のユダヤ移民)などの歌手たちはユダヤ名を捨て、フランス化した名前をもって舞台上上がった。

ところで、ユダヤ人かどうかの調査、探索には、ヒトラーばかりではなく現代の研究者にとつても姓は重要な指標になっている。改姓は、キリスト教への改宗とともに、ユダヤ人であることを隠す、ないしは捨てる、有効な方法である。実際シヨー後、改姓の申請を裁判所に申し立てて、認められた人たちの多くはユダヤ人である。また、ロジェ・アスコットの小説『ヴォーージュ広場の子供たち』の中で、改姓してユダヤ人であること隠してフランス社会に生きようとした、あるポーランド系ユダヤ人は、こう心情を語っている。「いいか、(…)俺はもう犠牲者にはなりたくないんだ。殺すべきユダヤ人にされたと思つたら、次には助けるべきユダヤ人にされる、或いは同時にその二つの役回りをやらされる、そんなことまっぴらだ。俺のやりたいことは、生きることだ、みんなのようにな。ユダヤ人に生まれたいなんて、おれは頼んだりしなかった、もうたくさんだ。よく覚えておけよ、(…)俺はユダヤ人なんていやなんだ、ユダヤ人としての俺を消すんだ、(…)他の奴らの前から、社会の一切から、将来にわたってな。」(Ascol 200)

☆8 現在、フランスにおけるユダヤ人の状況はかなり変化している。ユダヤ人の子供の四分の三が、成年に達する以前に何らかの形でユダヤ教育を受けているという。またイディッシュ文化の記憶ということも盛んに取り組まれている。さらに、フランス共和制の基盤であるライシテ、つまり公的空間から宗教を排除する原則に対してかなり批判的な勢力もユダヤ人の中に出てきている。

☆9 サルトルのこのユダヤ人理解は、すでに述べたようにユダヤ人の間で共感者も多かったのであるが、また批判も強かった。とくに、ユダヤ人固有の実質を無視している点、ユダヤ人の問題も含めてすべての問題の解決を社会主義革命に求めている点で、異議が唱えられてきた。

☆10 犯行声明が「警察の名誉」というグループからなされ、いろいろな憶測もなされたが、結局、犯人は捕まらなかった。死後二十年、一九九九年九月二〇日、新聞『ル・モンド』はこの事件に関して一頁全面を割いている。

☆11 十五歳の時、政治的活動により投獄され、一九二九年、十六歳でフランスに来た(Rabi, *L'homme qui est entré dans la Loi* 188)。

☆12 「黒人たちへの温かい心によつて」ということで、ピエール・ゴールドマンは何を考えているのであろうか。アンドレ・シユヴァルツ・パールは処女作『最後の正しき人』の後、ユダヤ人テーマは扱わず、アンチル諸島の黒人女性を主人公にした作品を発表している。彼の妻シモーヌはグワドループ島出身の黒人女性であり、彼女との共作『緑色バナナ入りの豚肉料理』(*Un plat de porc aux bananes vertes*)では、マルチニック島で過ごした子供時代の(失われた時)をパリの養護施設で生き直す黒人老女に焦点が当てられる。また、単著『混血女性ソリチュード』(*La Mulâtresse Solitude*)の主題は、十八世紀末のグワドループ島における黒人奴隷の反乱である。

☆13 とくに、シユヴァルツ・パールが「正しき人」の家系を設定して、それが「家族遺産」のように親から子へ受け継がれるとしている点で『ユダヤ主義の本質』(194)。

☆14 アルバム『通りながら』*En passant*, 1997 所収。

☆15 『エクスプレス』誌は『通りながら』の発売後、ジャン・ジャック・ゴールドマンのインタヴュー記事を掲載し、そのタイトルは「ゴールドマン、正しき人」である。本論で引用した「何人かの正しき人たち」の一人に、作詞者ゴールドマン自身を入れたのである。

☆16 「伝統的カノンによれば、良きユダヤ人とは共同体的で、それ故閉じこもったユダヤ人であり、悪しきユダヤ人とは辺境の人である」(Minc 227)

引用文献

シヨーレム、ゲルシヨルム『ユダヤ主義の本質』高尾利数訳、河出書房新社、一九七二。

Allia, Josette. 《A génération Goldman》. *Le Nouvel Observateur*. N° 1213. 5-11 février 1988.

Ascol, Roger. *Les enfants du square des Vosges*. Fayard, 1977.

Auron, Yair. *Les Juifs d'extrême gauche en mai 68. Une génération révolutionnaire marquée par la Shoah*. Trans. Katherine Werchowski. Albin Michel, 1998.

- Azria, Régine. *Le judaïsme*. La Découverte, 1996.
- Badiou, Alain. *Saint Paul. La fondation de l'universalisme*. Presses universitaires de France, 1997.
- Dictionnaire encyclopédique du judaïsme*. Robert Laffont, 1996.
- Deutscher, Isaac. *The Non-Jewish Jew and other essays*. Ed. Tamara Deutscher. Oxford University Press, 1968. (アインザイン・ド・ゾーニンチャー『非ユダヤ的ユダヤ人』鈴木一郎訳 岩波新書 一九七〇)
- Echebeyen, Alain, and Jean-Jacques Goldman *Les pères ont des enfants*. Seuil, 1999.
- Finkielkraut, Alain. *Le Juif imaginaire*. Seuil, 1980.
- id. *La sagesse de l'amour*. Gallimard, 1984.
- Fontaine, Jean-Michel. «Biographie:» *Parler d'sa vie*. <http://jean-jacques.goldman.net>.
- Franck, Claude, and Michel Herszkilowicz. *Le sionisme*. Presses Universitaires de France, 1993.
- Goldman, Jean-Jacques. «Positif et ...non homologué.» *Paroles et Musique*. Décembre 1985.
- id. «Goldman, un homme juste.» *L'Express*, 25 septembre 1997.
- Goldman, Pierre. *Souvenirs obscurs d'un Juif polonais né en France*. Seuil, 1975.
- Guland, Olivier and Michel Zetib. *Nous, Juifs de France*. Bayard, 2000.
- Halter, Marek. *La mémoire d'Abraham*. Robert Laffont, 1983.
- Israël, Gérard. *La question chrétienne. Une pensée juive du christianisme*. Payot & Rivages, 1999.
- Lévinas, Emmanuel. *Difficile liberté*. Albin Michel, 1963. (ハイロニコトハレ・ンシュトナス『困難な自由』内田樹訳 国文社 一九八五)
- Minc, Alain. *Spinoza, un roman juif*. Gallimard, 1999.
- Philippe, Béatrice. *Être juif dans la société française. Du Moyen-Âge à nos jours*. Complexe, 1997.
- Rabi, Wladimir. *L'homme qui est entré dans la Loi Pierre Goldman*. La pensée sauvage, 1976.
- id. «Pierre Goldman en prison. Notes et entretiens 1971.» *Les Temps Modernes*. N° 411, 1980.
- Rabinovitch, Gérard. *Questions sur la Shoah*. Milan, 2000.
- Sartre, Jean-Paul. *Réflexions sur la question juive*. Gallimard, 1954. (シヤン・ポール・サルトル『ユダヤ人』安堂信也訳 岩波新書 一九五六)
- Schwarz-Bart, André. *Le dernier des Justes*. Seuil, 1959.
- id. *La Mulâtresse Solitude*. Seuil, 1972.
- Schwarz-Bart, André, and Simone Schwarz-Bart. *Un plat de porc aux bananes vertes*. Seuil, 1967.